



徳間晴美著

授業実践における日本語学習者の コミュニケーション観に関する研究 —「ありたい自分」の実現を 支援する教育を目指して—

早稲田大学出版社、2013年発行、236p.
ISBN : 978-4-657-13504-9

張 贊

1. はじめに

本書は、著者の徳間晴美氏が2013年3月に早稲田大学より博士号（日本語教育学）を授与された博士論文をもとに執筆されたものである。本書は、日本語学習者の「他者との関わり方や人間関係の構築の仕方に関する認識」（p.35）、すなわち「コミュニケーション観」という着眼点から学習者にとってのコミュニケーションの意味や日本語教育の関わり方を考えようとした書である。本書において、著者は日本語教育としてのコミュニケーション教育の目的を問い直し、「円滑なコミュニケーション」という目標に疑問を投じた。そして、学習者を「学習者」である以前に「一人の人」として考え、学習者の心の働きや欲求に注目するという立場で、コミュニケーション教育の基盤と目的を新たに捉え直した。

また、本書は待遇コミュニケーション研究を引き継ぐものとしながらも、これまでの待遇コミュニケーション研究に新たな風をも吹き込ませている。つまり、学習者の抱える「待遇コミュニケーション観」と「敬語コミュニケーション観」の中身を丁寧に描き出し、それらに着目する重要性を明示することで、コミュニケーション主体の認識を重視する待遇コミュニケーション教育の本質により一歩近づけたのである。従って、本書は待遇コミュニケーション研究を行う者や、コミュニケーション教育に携わる研究者や日本語教師にとって有益な示唆が得られる良書だと言えよう。

本書は次の5章から構成されている。

第1章 序論

第2章 研究背景と本研究の位置づけ

第3章 語りから見た待遇コミュニケーション観の形成過程

第4章 敬語コミュニケーション観の変容過程の分析から見た授業実践の意義

第5章 結論

本稿では、まず2節で各章の内容を概観した上で、その意義と展望を述べる。

2. 各章の概要

まず第1章では、はじめに学習者は常に「自分なりに最善であると考えもの」(p.2)を選んで自分のコミュニケーションや在り方を主体的に方向づけるという事実気づくまでの経緯及びその事実を掘り下げる必要性について述べた。そして、「コミュニケーション教育の授業実践において、学習者の個別のコミュニケーション観に着目する重要性を示す」(p.3)という本書の目的とその意義を提示した上で、本書の構成と展開の仕方を示した。

コミュニケーション教育の在り方を考える際に、ある根本的で本質的な問いが必ず伴う。それは、「学習者にとって一体コミュニケーションとは何か」という問いである。第2章では、著者はこの問いに対し、「やりとりとしてのコミュニケーション」と「人間的営みとしてのコミュニケーション」という見方で独自の見解を示している。場面場面の「やりとり」が人の生きる時間を通して重なり連なることで「人間的営み」につながる。そして、その根底には、「自分はどのような人でありたいのか」という意識と願望が流れている。学習者はこのようにして他者とのコミュニケーションを通して、主体的な認識に基づいて自我を形成し、自分らしさを保ちながら人間的に成長していくと著者は指摘する。コミュニケーションの意味や自我形成とコミュニケーションとの関係性への検討によって、コミュニケーション教育は学習者の「ありたい自分」の実現を支援することを目的にすべきだという著者の主張が導かれている。

章の後半には、研究の理論的枠組みを「待遇コミュニケーション」の理論(蒲谷2003)を用いる理由や、待遇表現教育に関わる先行研究で見られる成果と課題が挙げられ、「敬語コミュニケーション」を切り口にする研究の経緯と研究の視座も記述された。

続いて第3章は、学習者に内在する待遇コミュニケーション観の個別性と形成過程を捉えるための調査編である。ここでは、待遇コミュニケーション観とは「コミュニケーション主体の待遇コミュニケーションに関する認識のことであり、表現行為あるいは理解行為をする際に、五つの要素(人間関係・場・意識・内容・形式)の連動の仕方に影響を及ぼすものである。」(p.36)と定義されている。3名の学習背景の類似する学習者へのインタビュー調査と語りデータへの質的分析及び考察によって、「ビリーフ、願望、性格、母語・母文化」を軸にしなが、「知識的・情動的学び」と「個人的経験による学び」との相互影響によって独自に形成され、個人化されていきながら、「ありたい」自分に向かっていくという学習者の待遇コミュニケーション観の形成過程が鮮明に描かれた。それと同時に、一人の学習者の「本当の自分を見失う戸惑い」という語りへの考察から、授業実践における学習者の日本語での待遇コミュニケーション観の意識化を促すことの必要性も浮かび上がった。

著者は第3章で得られた教育的示唆を自身の行った授業実践である「敬語コミュニケーション科目」に反映させた。第4章は、授業実践に参加する学習者の敬語コミュニケーション観(コミュニケーション主体の敬語コミュニケーションに関する認識のこと)の変容過程から授業実践の意義を問う実践研究である。章の1節から3節までは「敬語コミュニケー

ション科目」の狙いや概要、学習者の敬語コミュニケーション観を捉える観点が紹介され、4節、5節、6節はそれぞれ三つの分析、すなわち「学習者の敬語使用不安の様相の分析」、「敬語コミュニケーション観の変容過程の分析」、そして「両者と授業実践の内容との関連性の分析」から成っている。三つの分析テーマが相互に関連し合い、一つひとつの解明によって徐々に授業実践の意義が掘り出されていった。以下ではこの三つの分析について詳しく見ていく。

著者が最初に注目したのは授業実践の中で感じた学習者の「敬語使用不安」であった。授業に参加した学習者の記入した内省シートをKJ法で分析し、それによって、「学習者は、自分が表現したい気持ちと敬語を使う意識との間に隔たりを感じながらも、敬語を用いたコミュニケーションの学習と実践に向き合おうとしている。しかし、緊張や反省の経験があるために、敬語使用を回避したりためらったりすることで、会話参加への自信を失い、敬語習得への展望や目標達成への疑念を抱く。」(p.126)という学習者の敬語使用不安の全体的な様相が浮かび上がった。また、敬語使用不安の中に、「ありがたい自分」という理想的自己像を目指して生きようとする学習者の心理が反映されていることも考察された。さらに、それを受け、授業実践者の認識すべきことが二つ指摘された。一つ目は、授業実践者は学習者が敬語使用不安を抱き、挑戦と葛藤を経ながら敬語コミュニケーションの学習と実践に向き合おうとしているという事実であり、二つ目は、敬語使用不安の対象は、授業実践者が意識化を促す方向に影響を受ける可能性があるということである。

次に、授業実践の中で敬語使用不安を含め、学習者の敬語コミュニケーション観がどのように変容していったかという課題に焦点が当てられた。6名の学習者への質的分析を通して、それぞれの学習者の敬語コミュニケーション観の変容過程が明らかになった。敬語コミュニケーション観の変容と敬語使用不安の変容の仕方との関連性への考察によって、「敬語コミュニケーション観の積極的で前向きな変容」と「目標や期待の堅持および具体化」、「敬語使用不安」との関連性が分かり、敬語コミュニケーションの学習にとってよい「循環」を作る手掛かりが見えてきた。また、6名の敬語コミュニケーション観の変容過程への総合考察によって、学習者にとって敬語の位置づけは、「自分の日本語でのコミュニケーションの中に自然と存在すべきもの、あるいはそうであってほしいもの」(p.181)という位置づけに変わっていったことが分かり、授業実践の場において、学習者の「ありがたい自分」を意識させることの重要性が指摘された。

さらに、学習者の敬語コミュニケーション観の変容に関わった意識及び認識と授業実践の内容とのつながりが分析された。それによって、授業実践の意義、すなわち「学習者が、自分と他者の間の個別性と共通性を認識しながら、一度立ち止まって自身のコミュニケーション観を捉え、この先向かおうとする「ありがたい自分」に近づくための場」(p.200)となる可能性が述べられた。

終章である第5章では、これまでの結果をまとめ、コミュニケーション教育の授業実践の在り方について、著者が研究を通して重要だと感じた、「学習者のコミュニケーション観の意識化を促す重要性」と「授業を通して接する他者の存在の意味」について述べられた上で、コミュニケーション教育に携わる授業実践者に向けた著者の提案がされている。ここで指摘されたのは、授業実践者が授業実践の早い段階で学習者に「現在の私」と「コミュ

コミュニケーション」及び「未来の私」との関係性を意識させること、学習者同士が相互のコミュニケーション観を受け入れられる授業の雰囲気を作ること、そして、教室の他者との創発性の生じる対話を生む活動をデザインすること、及び授業実践者が自身のコミュニケーション教育観を持ち、それとしっかりと向き合うことであった。

3. 本書の意義と展望

本書は学習者の「心」を描こうとした書だと言える。学術的用語に置き換えれば、学習者の情意面・感情面、学習者の意識と認識に注目した研究と言うこともできる。1980年代以来の日本語教育は、ホーリズムの時代に入ったと言われている。学習者を単に知的な側面だけでなく、ホール・パーソンとして、知的・感情的・精神的・身体的・美的・道徳的・社会的な側面を含んだ全体として理解することが強調されるようになり、知性と感情の融合としてトータルに捉えることが求められてきた。このような時代の流れの中で、著者は人の根源にある「ありたい自分」に向かいたいという学習者の願望に目を向けることで、インタビュー調査と自身の実践研究を通して学習者のコミュニケーションの意味や学習を捉え直し、日本語教育の学習者の人間的成長に携わる可能性を示した点において、日本語教育学にとって意義が大きいと思う。

学習者の「心」をできるだけ客観的に捉えるためには、適切な観点と分析方法、厳密な分析過程が求められる。本書は、量的な手法ではなく、質的な手法を用いることで学習者の心の繊細な動きを丁寧に描き出すことに成功し、個別性の中に見られる共通性への解明に挑戦した。巻末資料に載せた各学習者の「意識・認識の分析表」と「意識・認識ラベルと実践内容との対応表」では分析の結果が明瞭にまとめられているため、本文と合わせて読むとよいだろう。

また、本書の待遇コミュニケーション研究としての発展意義も述べたい。学習者のコミュニケーション観という深い認識及び「ありたい自分」という人としての願望への注目は、待遇コミュニケーション教育の基盤である「相互尊重に基づく自己表現」に還元しながらその中身をさらに充実させたと言うこともできる。つまり、言葉におけるやりとりだけではなく、学習者は自分と関わる人との相互のコミュニケーション観を含めた各々の価値観の違いを尊重し、受け入れながらも、自分の目指す理想的自己像に近づき、唯一無二の存在である自分を形成するということが待遇コミュニケーション教育の重要な目標であり、教育は学習者の様々な意識と認識を自覚化・活性化させる重要な役割を果たすものである。それと同時に、敬語に関する知識や敬語コミュニケーションの大切さへの理解により学習者の敬語使用不安を軽減することができ、間接的に学習者の「ありたい自分」に近づく過程の手助けになるという考察の結果から、授業における知識・情報の提供の意味と重要性も明らかになった。しかし、当然なことではあるが、知識・情報を与えることが目的ではなく、それらが学習者の人間形成に関わるという点への教師の認識が重要であることも、本書での実践研究の結果から窺うことができるだろう。

最後に、本書の今後の展望について私見を述べたい。人は生来一人ひとり異なる独自の存在であり、また一人ひとり理想的な自己に向けて人生を歩みたいと考えている。しかし、

ありたい自分の実現の難しさを我々は経験的にも実感している。なぜなら、それを妨げたり制限したりする要素が多く存在しているからである。外的・環境的要素はともかく、内的要素について言えば、例えば、ありたい自分の実現に背反するような考え方や行動の癖や自覚されにくいコミュニケーション上の問題点を我々はいくつか持っているだろう。それらは特に他者や集団との関わりの中で違和感や心残りとして現れやすく、ありたい自分の実現が制限されると感じることも少なくない。教室内の活動で言うと、グループ活動における学習者同士の共同作業において何らかの問題やトラブルが伴うことを筆者は度々見受ける。集団の中でどのように「ありたい自分」を追求し、実現するのか。他者との間に摩擦やトラブルが生じた時に学習者の「今の自分」と「ありたい自分」との間の距離の取り方が真に問われるような気がする。我々は個における多様性を認め、お互いの独自性を尊重し合いながらも、集団における調和したつながり方も求めなければならない。学習者と敬語との「つながり」だけではなく、学習者と他者との「つながり」における「ありたい自分」の位置づけ方への注目によって、他者・社会に対する責任感や配慮、心配りの育成、そして、学習者の「ありたい自分」の実現を支援するコミュニケーション教育の可能性もさらに深められるのではないかと筆者は考える。

4. おわりに

教育者は、目の前の学習者一人ひとりが生き生きと個性を發揮しながら他者と調和した関係を結び、他者と共に成長していく姿を見ることを望んでいる。そのために、学習者の「頭」—認知面だけでなく、学習者と一体感を持って彼らの「心」—情意面も理解しなければならない。著者が学習者に寄り添い、学習者の人生を自分のことのように大事に思って綴られた本書を読み終えた後、我々研究者や授業実践者は、学習者のコミュニケーション教育に関わる意義を捉え直し、学習者の人生に影響を与えうるという重要な責任と義務を改めて感じられるであろう。

参考文献

蒲谷宏 (2003) 「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座 日本語教育』39、pp.1-28

(ちょう いん 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)